

全日本剣道連盟制定「剣道指導の心構え」長期構想企画会議資料

《竹刀の本意》

技術性 (対人)	身体性 (個人)	文化性 (歴史)
<ul style="list-style-type: none"> ・「<small>もろてけん</small> 双手剣の理」―その制約性の中で攻撃と防禦を一体とした剣捌き<small>けんさば</small>が求められる。 ・「<small>けんえ</small> 構えから発して構えを持ち運んで、<small>けんえ</small> 構えに至る」循環的運動の獲得 ・「<small>けんえ</small> 構え」と「<small>かんご</small> 間合」の攻防による「<small>けんたいいっち</small> 懸待一致」の技遣い<small>わざづか</small>（<small>よみ</small> よみ、<small>よそく</small> 予測と反射） ・「<small>きょうだつ</small> 有効打突」に凝縮された「<small>きょうしゅく</small> 競技する姿の文化性」（<small>きけんたい</small> 気剣体の一致〈要件の事実判断〉）↓<small>しんきりよくいっち</small> 心気力一致〈<small>げんみょう</small> 玄妙な技―要素の価値判断〉） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「<small>じょうきよかじつ</small> 上虚下実」の「<small>しぜんたい</small> 自然体」と「<small>かま</small> 構え」 ・「<small>いどう</small> 移動（下肢）」と「<small>うち</small> 打突（上肢）」の結合運動。<small>じょうかし</small> 上下肢の役割分担と同時に、よりよい統合としての「<small>しんたい</small> 身体（意識・感覚・技法）」 ・「<small>てん</small> 点（<small>けんせん</small> 剣先）」と線（<small>はすじ</small> 刃筋）と面（<small>しぎ</small> 左右の鎧）の剣遣い（<small>たき</small> 刀・木刀・竹刀） 	<ul style="list-style-type: none"> ・<small>ぶじゆつ</small> 武術（実用文化） ・<small>ぶぎ</small> 武芸（芸道文化） ・<small>ぶだう</small> 武道（競技文化） ・「<small>けん</small> 剣は〈刀・木刀・竹刀〉という全剣道史を一貫するものである。」「<small>たけぶ</small> 竹刀という剣」で、今後どのような剣道を切り開いていくのか ・「<small>ほんのう</small> 本能を刺激しつつ、よりよい理性へと導く剣」〈相手に向かう剣であると同時に、自分自身にも向う剣である―<small>せつじんとう</small> 殺人刀↓<small>かつじんけん</small> 活人剣〉

技術性 (対人)	身体性 (個人)	文化性 (歴史)
<p>・「剣道の礼法」を相対で実践展開する。</p> <p>「自然体」構え」と捉え、姿勢（「上虚下実の身体技法」「腰と胴の坐り」「背骨の立て方」「肩の巻き落とし」「目線と正対の目付け」―額の真中）を相対の立稽古として、次の九歩の間を往還させて実施する。</p> <p>・長呼吸呼吸による「合気合わせ」から「和して同ぜず（観見二つの目付け―俯瞰視の大事）」へ。対峙する自と他の「間」に生ずる「機」感覚の深化。</p> <p>・技の遣い方としての身体技法の基本がすべて「礼法」の身体技法・実践の中にあることを知る。（構えから発して構えに至る）</p>	<p>・各種の座り方―「あぐら」（土着的）↓正座（江戸初中期日本で生まれ定着）↓「跪座（踞）」（両足を爪先立て、両踵で臀部を支える姿勢）↓蹲踞（片膝蹲踞（片膝を地面から離す）↓「相撲や剣道の蹲踞」。「立ち方」「坐り方」を折目正しく姿勢を正して身体技法として実践展開する。</p> <p>（坐位↑↓立位の往還）その繰り返しによって股下空間の多様性とその身体技法を体得する。</p> <p>・立礼（三節の礼、四十五度・三十度・十五度）と坐礼を単独、相対で行なう。</p> <p>・歩み足歩行とそのすり足歩行、（「むり・むだ・むら」なく自然体を持ち運ぶ）↓充実した氣勢と適正な姿勢で王道の「構え」を持ち運ぶ（すり足歩行―すり足送り足―開き足）</p>	<p>・危機管理能力（臨機応変、備え有れば憂い無し、静かなる強み、人間存在の威儀を示す（「居付き」死））↓「自然体での立居振舞い」</p> <p>・「剣道と暴力は紙一重」。許されない暴力と体罰の違いを明確にすることが大事。自らが自らに課す体罰（自己啓発的な自律的生活規範）、その延長線上にある人から受ける体罰（深い愛情・信頼感に裏打ちされた他律的な生活規範―子育て（本能を刺激しつつ、より良い理性への導く教育））</p> <p>・驚きは喜びに、喜びはお礼に、お礼は合掌に（ここで人間は初めて動物と訣別した。お礼は躍動して思い余って拍手となる）（河井寛次郎―「礼法」の源流にはこのような心気力の現象を捉えておきたい）「鍛え練る」↑↓「しごき、いじめ、暴力」</p> <p>・「礼に始まり、礼を尽して闘い、礼に終る稽古と競技場面」（相手の存在を抛りどころとして、自己を高め創造していく闘いの場面作り）</p> <p>・「競技規則には、時間外ではあっても見苦しい引き揚げの一本は取り消される。」「又非礼なる言動は反則となる。」（競技と文化のバランスシート―誇り高きマイナースポーツ宣言）</p> <p>・「禮」「躰」という字は剣道の「競技する姿の文化性」を象徴するもの。</p>

技術性 (対人)	身体性 (個人)	文化性 (歴史)
<p>・「修行（向上）と指導（向下）が同時である」（湯野正憲）</p> <p>・「相互否定（殺人刀）」↓「否定的肯定（活人剣・教育と競技）」―「調和（鬼一法眼（5・5の十）（2・8の十）（1・9の十））勝敗を超えた世界（鳥が選んだ枝、枝が待っていた鳥）世界は二つながらにして大調和（河井寛次郎）―対立から調和へ。</p> <p>・世阿弥の「時分の花（少年期）」―「当座の花（珍しき花・凜とした青年期）」―「誠の花（壮年期以降の“久しき花”、老骨に残りし花）」</p> <p>・年齢と共に衰えを示す体力。年を負うごとに完成度を増していく全身の統一と調和。この絶対矛盾の中で、自らの心身が「どう成るか」として実践的に探究され技は益々冴えていく。</p>	<p>・「素振り」（一人稽古―いつでも、どこでも―身体（意識・感覚・技法）の開発。）</p> <p>・「調身・調息・調心」（東洋的身心論）</p> <p>・「本體は體の事理なり」（本體を確かめ合う師弟同行の身体行）（嘉納治五郎）</p> <p>・「初心忘るべからず」（世阿弥・是非・時々・老後の三つの初心の大事）―「芸道思想」を育んできた。―「守・破・離」。</p>	<p>・「新生人類一万年の歩み」（三世代共習・共導という共生の括りと創造（松井孝典）</p> <p>・「自然の摂理と人間の営みとを一体のものとして把える。」アニミズム（自然崇拜・畏れ敬う自然法爾）とシンクレティズム（多神教・山川草木悉有仏性・「技」は自然現象から命名される。</p> <p>・「生老病死」自らの体と向き合って生きる「養生思想」を育んできた。</p> <p>・「子供叱るな来た道じゃ、年寄り嫌うな行く道じゃ」（空海）</p>